

「内閣府ソーシャルビジネスインターンシップ プロジェクト」から、見えてきたこと

—「インターン」は「目の感動体験」以上のことを
考えさせてくれる/ハーメルンの笛吹き男—

桜 井 芳 生



「ギャザリング」会場で、インターン参加経験者としての意見を述べる学生。(写真・図については無断転用はご遠慮ください。以下同じ)



上記学生の発言に真剣に耳を傾ける、おじさん・おばさんたち。

【はじめに。「内閣府地域社会雇用創造事業・ソーシャルビジネスエコシステム創出プロジェクト(事務局：NPO法人ETIC.)・連携大学・担当教員」?!】

私事で恐縮だが、筆者はここ二年度ほど、「内閣府地域社会雇用創造事業」の採択事業の一つである「ソーシャルビジネスエコシステム創出プロジェクト(事務局:NPO法人ETIC.)」の「連携大学」の「担当教員」を努めさせてもらった。

単純化していえば、それぞれの「地域」の「ソーシャルビジネス」法人に、大学生をインターンシップとして、派遣し、事前事後の支援・指導・観察をする役割だ。

昨今、注目に値する「インターンシップ」「ソーシャルビジネス(以下SBとも呼ぶ)」「NPO」「お役所仕事」「大学・学外連携」……などについて、非常に勉強になる参与観察をする機会となった。拙速を顧みず、印象が鮮明なうちに、観察した事実、考察させられたことなどを記しておきたい。

業務の事柄上、「守秘義務」「守秘道義」がある事実は少なくない。

また、とくに「お金の流れ」を追尾・記述したかったが(源が公金なので、まったく可能なはずだ)、「金の【追及】が!、縁の切れ目」になる可能性が高いので、あえて踏み込まなかったところもある。

この種の「学外との連携」事業にとって、個々の大学教員は、「一本釣り・される・弱い」立場である。

「相手が、トリガー(引き金)と解釈しうる」振る舞いを一度してしまうと、二度と話がまわってこなくなる可能性が高い。

読者は、筆者がこのようなバイアスのもとで本稿を記述していることを、十分、「織り込んで」、読んで欲しい。

【そもそも、「内閣府地域社会雇用創造事業」って、何？】



地域社会雇用創造事業は、地域社会における事業と雇用を加速的に創造することを目指し、実施している事業です。 [詳細はこちら▶](#)

社会起業インキュベーション事業
事業プラン・コンペティションの開催など、社会起業家のスタートアップを支援します。

社会的企業人材創出・インターンシップ事業
地域のNPO等へのインターンシップなど、6週間以上の人材創出コースを用意しています。

(<http://www.chiikisyakai-koyou.jp/> より。 2012年3月23日採集。原図はカラー、以下同様。)

以上は、内閣府地域社会雇用創造事業のウェブページのトップにある「キャッチ・フォト？」を、採集・ペーストしたものである。

★★ウェブ閲覧リテラシーの高い方なら、この写真を見ただけで、この事業の「おじさん・おばさんたちが、若者に媚びようとしている」・「痛々しさ」「いかがわしさ」を感じることができらるだろう。

↓

まず、一番左の女性に注目しよう。ご覧のとおり、笑顔とともに、「上歯茎」が露呈し、あごが二重あごになりかけている。容姿でもって人を差別する気はまったくないが、「ギャラが高いモデルさん」ではけっしてないだろう。

★★決定的なのは、左から二人目の「ロン毛」の男性だろう。髪の色は、三人の男性のなかで、「もっとも染まって」おり、ロン毛で、「シャツの前あけ着（シャツのボタンをまったくとめずにTシャツを見せる）」しており、しかもその上シャツがオタクしか着ないようなヨレヨレのチェック柄で、さらにそのなかのTシャツが、「ヘンリーネック（えりぐりにボタンがついている）」で、しかもその「ボタンを、上二つあけ」している。そのように開けられているために、「鎖骨」のみならず、「胸骨の最上部」までが露出している（露出させている）。その露出された胸元には、「斜めに、ネックレスがさがり」（じつはほとんど鉛直にさがっているのだが、体のほうが斜めなので、明確にネックレスの方が斜めに見える）、そのネックレスは、「ごく細のシルバー系？」で、錘（おもり）は、極小の南京錠型だ。

↓

こんな「男子」が、ニヤけた笑顔で、PCの画面に視線をおくっている。

右から二人目の男性。彼が、実質上の「センター」である。髪は、美容室でカットされたのか理容店でカットされたのかわからないような「ビミョーな」キャラづけをされている。「理容店派」の

若者も排除しない、ということだろう。

四人とも、「笑顔」だが、口は笑っているが、目尻にまでは笑いがでない、いわゆる「非＝ドゥシエンヌ・スマイル」である。

↓

ひとことでまとめれば、「痛々しく、媚びている」図、といえるだろう。

この事業の定義的説明は、上記の「キャッチ・フォト」にもあるが、

↓

「この事業は、明日の安心と成長のための緊急経済対策（平成21年12月8日閣議決定）（PDF形式:785KB）の一環として、地域社会における事業と雇用を加速的に創造することを目的として、内閣府より補助を受けた12の事業実施団体が実施している事業です。（平成22年3月交付決定）」
（<http://www5.cao.go.jp/keizai1/koyou/koyou.html> 2012年3月27日採集）

とのことだ。

この目的のもと、上図キャッチ・フォトのように

↓

「社会起業インキュベーション事業」（以下「起業」系）と「社会的企業人材創出・インターンシップ事業」（以下「SBインターン（シップ）」）の二類型がある。

↓

この事業にたいして、

<http://www.chiikisyakai-koyou.jp/group/>（2012年3月27日採集）に、よると、12団体が、採択されて「事業実施団体」となっている。この「事業実施団体」は必ずしも、法定NPO（特定非営利活動法人）とは、かぎらず、「株式会社」もあれば、「一般社団法人」「任意団体らしき団体」（複数種類の団体による「コンソーシアム」「会議」「専門カレッジ」）もある。

その12団体のうち、私が関連したのが、「特定非営利活動法人 ETIC.」であり、このETIC.（「エティック」と読む）は、上記の「起業」系も、「SBインターン」系、双方、採択されている。

で、私が関わったのは、この後者の中の、「SBインターンシップ事業」であった。

でしかも、いわば直接かかわったのは、この「SBインターンシップ事業」には「地域事務局」と呼ばれる各地域の地域おこし関連のNPO系団体（これまた、法定NPOとはかぎらず、任意NPO、

合資会社、株式会社、有限会社も、ある）が、名を連ね、

↓

私は、その鹿児島地域事務局団体から、「一本釣り」されたわけだ。

上記のように、「平成21年12月8日閣議決定」から「平成22年3月交付決定」という、非常に短時間に、上記のような「ネットワーク」が構築されたわけだ。驚くしかない。いうまでもないが、本事業採択されるまえに、事前のコネクションがあったと考えられるだろう。実際、本事業の初年度に、ギャザリング（東京での集会）に参加すると、大学関係者以外は、だいたいすでに知り合いであった。われわれフツーの人たちがおそらく知らないうちに知らないところで、「霞が関から鹿児島（もちろん沖縄も）まで」、このような「いざ鎌倉！（いざ予算ついた!）」的なネットワーク・コネクションがすでにできているのである。以下このネットワークを、「エティック・族」と呼ぶこととしよう。

【お役所言葉すごろく・お役所「出世魚」言葉】

これから、お役所につとめるつもり若者たち、あるいは、お役所を相手とする職業につく人たち、あるいは、納税（消費税を含む）をする人たち、あるいは、お役所から公的支援をしてもらう可能性のある人達、つまりは、ざっくり言って、日本に永住許可をもっているすべての人たち（以下「ステイクホルダーズオブジャパン」あるいは「SHsoJ」と呼ぶ）は、

↓

「お役所言葉すごろく」あるいは「お役所「出世魚」言葉」（おそらく両者とも筆者の造語）という概念をしておくといい。

↓

まさにいい例が「ソーシャルビジネス」である。

↓

多くの「ステイクホルダーズオブジャパン」（つまりは日本国籍者と永住外国人）にとっては、「ソーシャルビジネス」？ なに、それ？ といったところだろう。

↓

そもそも、ほとんどすべての「ビジネス」は「ソーシャル（社会的）」だろう。

もちろん、「ソーシャルビジネス」とは、このような「エティック・族」専用の言葉でなく、今(2008)、町田(2000)、斎藤(2004)をはじめ、多くの文献で議論され、定義されている概念である。

↓

しかし、だとしても理解し難く、非好意的に言えば冗長（「ビジネス」のなかに「ソーシャル」の含意はすでにあるのだから）な用語法である。

↓

とくに、「概念にうるさい大学の先生」などは、「ソーシャルビジネス」という用語をまえにただだけで、二三日は、歩みがとまるだろう。

ところが、例の「ギャザリング」にはじめて参加したような大学の先生以外の、各地のNPO系の人たち、つまりは、筆者の言う「エティック・族」の人たちは、なーんの、躊躇・困難も感じさせることなく、勝手知ったる我が家の中のように、動く、のだ。

↓

なぜ、こんなことが可能なのだろう。

↓

もちろん正解はわからないが、私の答えは、「すでに同様なことを何度もやってきた、から」だ。

つまり、「ソーシャルビジネス」の「前にも」、似たようなことを、「族」、たちはやっていたのではないか？

↓

「何」を、か？

↓

これまた、正解はわからないが、「コミュニティービジネス 云々」だと思う。

「ソーシャルビジネス」ほどには、結局のところ、人口に膾炙しなかったが（ソーシャルビジネスだって、人口には膾炙していない？ 「族」に内属してしまった筆者には客観的感覚がすでに失われている）、「その前」に、お役所ならびに「族」あいだで、はやったのは、「コミュニティービジネス」略して「CB」だったようだ。

では、「コミュニティービジネス」(CB)のまえに、流行った言葉は、「何」だったか？

↓

まさに「NPO」あるいは「ノンプロフィット/ NP」ではなかったか。この「NPO」は、言葉としては大当たりだった。

おそらく、「族」の形成とこの種の「お役所言葉すごろく」「お役所「出世魚」言葉」現象とは同時進行で、NPO,CB,SB(ソーシャルビジネス)……と、「すごろく」の升目をあがっていくうちに、かの「族」もだんだんと形成されていったのだろう。(映画でいう「黒澤組」「北野武組」みたいなもの?)。

【なぜお役所の「プロジェクト」は、「字数」が長くなるのか】

さて、上記のような「お役所言葉すごろく」「お役所「出世魚」言葉」と密接に関連した現象として、「役所の「プロジェクト」は、「字数」が長くなる」という現象がある。「ステイクホルダーズオブジャパン」（つまりは日本国籍者と永住外国人）である読者の方にはぜひ、「なぜそうなるのか」かんがえてほしい。

まさに私は、「内閣府地域社会雇用創造事業・ソーシャルビジネスエコシステム創出プロジェクト（事務局：NPO法人ETIC.）・連携大学・担当教員」（ワードによるカウント、57字！）であった。

なぜお役所の「プロジェクト」は、「字数」が長くなるのか？

↓

これも正解はわからないし、いろいろな要因が絡まった結果だろうが、私の答えはこうだ。

↓

すなわち、共時的差異化（省庁間差異化）・通時的差異化（昔の自庁との差異化）、この二つの効果が必要なので、それにおうじて、文字が多くなってしまう。

まず、お役所のどこの省庁がやっているかをしめさなければならない。この場合は「内閣府」で、「漢字三字」必要。

↓

つぎの他の（省庁あるいは。昔の自庁の）プロジェクトとの「違い」を示さなければならない。この場合は、「地域社会」。で、漢字四字消費。

「雇用創造」はあっちこちでやっているだろうが、ないとなにやるのかわからないので、必要。漢字四字消費。

「事業」も、必要字数で、二字消費。

「ソーシャルビジネス」、これは、前記の「社会」とかぶるが、「CBでなくてSB」であることを示すために必要。（逆にいえば、前記で「地域」がはいっていたのは、「CB」で申請するのも可能だよ、というキュー（暗黙のメッセージ）ではないか）。

「エコシステム」。カタカナ系は、とかく字数を喰う。しかし、ETIC.としては、「ビジネス・エコシステム創出」（つまり、単一の業種が生じてても地域社会は再生しない。複数の（新）業種が、エコシステムのように「需要供給」を相互に担うようにならない）は、まえまえからやっている「実績」なので、落とせない。

「創出」も、前記の「創造」とかぶるので、字数つかいたくないが、つかわざるをえない。むしろ、「創造」との「完全かぶり」を回避して「創出」に、逃げた？

「プロジェクト」もまったく同事情だが、「事業」との「完全かぶり」を回避した。

↓

「創造事業」と「創出プロジェクト」の字義レベルでの意味の違いなんて、言える人います？

【お役所「流派」方言】

前二節と関連して、またまた「ステイクホルダーズオブジャパン」（つまりは日本国籍者と永住外国人）である読者の方には、ぜひ知っておいてほしい現象がある。

いわば、「お役所「流派」方言」現象だ。

例えとして、ちょっとトピックは変わるが、読者が（鹿児島ないし西日本の）大学生（卒業生）ならば、大学の先生が、学生たちのことを、「一回生」「二回生」……などと呼ぶのを聞いたことがあるだろう。「…回生」の呼び方の起源は確実にはわかっていないようであるが、日本経済新聞電子版の記事「大学4年生、関西ではなぜ「4回生」と呼ぶのか」によると、どうも京都大学（京都帝国大学）が、みなもとらしい。「最も古い資料では、1925年の（京都帝大の＝桜井）学内新聞に「〇回生」の表現が登場する」という。鹿児島大学には、九州大学出身の先生が多い。九州大学はその起源の一つを、京都帝国大学福岡医科大学にしている。それにかぎらず、九州大学の教員は、京大卒、京大卒の教員の教え子、その孫学生、ひ孫学生……が多いだろう。

というわけで、「〇回生」の表現によって、その表現をつかうひとが、京大卒業生の「弟子筋」流派であることがかなりの蓋然性で推測することができる。

このような現象を「流派・方言」と呼んでみよう。

お役所言葉でも、このような「流派・方言」現象が多く存在するだろう。今回2月に数日関連会議に学生とともに出席して「第6次産業」「商工農連携」などの言葉をはじめて聞いた。造語者は別だが、前者はおもに農水省用語、後者は（農水省も使うが）経産省が、よく使う用語のようだ。

このように「流派・方言」に注意するだけでも、「このお金（予算）は、どこからながれてきたのかなあ」とだいぶ推測できるようになるだろう。

どなたか（読者）、「ギャザリング（会合）」の「流派・方言」分析してみませんか？ ふつうの日本永住者（SHsoJ）にとって、「ギャザー」といったら、「紙オムツの股のギャザー」ですよ！

【さて、後半は……】

以上、ちょっとおちゃらけて書いてきたが、以下、私が当局に提出した「報告書」をほとんどそのまま再録してみたい。当初は以下の部分と再構成しなおして、一つの論文としようと考え始めたが、本稿の読者である学生（とくにインターン参加学生）には、以下の公式報告者の裏で、私がどんなことを考えていたのかをきっちり「分別」したほうが、「大人の勉強」になる、と思い直した。以下、「明朝体」の部分だが、提出した報告書である（一部変更した部分もある）。後半との対比がよくわかるように、との意味もこめて、前半は、ちょっと、おちゃらけて書いた。が、「おじさんが、冗談めかして、何かを語るときには、それこそが、一番伝えたいこと」である。

以下の文にある（肝）とは、ETIC.から明示するようにもとめられた重要点。「肝」も一種の「流派・方言」ですなぁ。

内閣府地域社会雇用創造事業 事業報告書 ソーシャルビジネスエコシステム創出プロジェクト（事務局：NPO法人ETIC.）

【大学の中での本事業の位置づけ（契約主体、組織的位置づけ、組織体制、担当スタッフ）】

契約主体：国立大学法人鹿児島大学、教授 桜井芳生が「マチトピラ」と協力のもとプロジェクトをおこなう。組織体制・担当スタッフ：桜井芳生の主に二つの授業においてマチトピラとのコラボレーションを行った。



【当初、期待・想定していた学生の人材育成目標に対する実際の効果や学生の変化（学びの質や深さなども）】

当初、参加学生個人の社会的コミュニケーション力の向上を主に期待していた。しかし、実際の効果においては、当初の目標を達成する以上の効果があった。すなわち、各学生におけるキャリア

形成イメージが具体化した。社会の中で働くことがどのようなものであるかのイメージが具体化した。卒業後の進路の具体化が進行した。インターンが終わったあとにおいても、実習先企業とコミュニケーションを保つ学生が多く、インターン後の大学内での学習が、地域におけるさまざまな試みと連動するようになり、学内での「学び」の意味が、充実するようになった。インターンを経験した学生を間近でみることで、非参加学生が、良い意味で、刺激をうけ、インターン希望する者、学外研修（短期留学など）を希望する者などが増加した。また、彼らも、学内学習・従来のバイト等を自らの糧にするよう考えるようになった。



【トレーニングノート（日報）の活用方法や特徴とその効果】

随時閲覧し、時に応じてアドバイスをおこなった。また、インターン終了後、学生・教師で、一緒に振り返り、参加時においては「俯瞰」することでできなかった変化を俯瞰し、本人にとっての再意味づけをおこなった。執筆本人の了解を得て他の学生との相互閲覧もおこない。つつい「一人にこもりがち」になる視点の拡大化をめざした。



実施事業を活かした今後の展開 自由記述

【学生自体を「お客さん」としない、プロジェクト構想へ。一学生に「舞台うらまで」見せてしまおう！ー】

本プロジェクトは、報告者（鹿児島大学、櫻井）にとっても大きな気づきの連続であった。本事業を活かした今後の展開に関しては、この私の諸発見をぬきにしては、述べることができない。すこし、時系列にそって、本事業をたどりなおしてみたい。（2年間で得た「肝」）

【リクルート段階（いわゆる「ナンパ」）】

本事業においては、リクルーティング（志望学生さがし）の段階でも、すこし、工夫をおこなっ

た。マチトビラの両CP（「チャレンジ・プロデューサー」のこと、地元NPOのお兄さん・お姉さん）が、キャラクター的にも世代的にも、学生たちに非常に魅力的な方であるのでは、以前の経験からわかっていたので、私櫻井が、担当しているキャリア系の二授業において、「はじめは、ビデオレター」で登場し、満を持して、本人が登場して、プロジェクトを説明するという、「小出しマーケティング」手法をつかっ



てみた。結果は大成功で、プロジェクト説明の回以前に、学生たちが、両CPに「親近感」

をいただくことができ、この種の「勧誘」につきものの「勧誘者の正体不明さ」をほとんど払拭することができ（胆）、一般学生とのラポール（信頼ある人間関係）をきづくことができた。



授業の初回に放映した事前ビデオレター

【事後報告会】

教員としての私が、じっさいに、学生の変化をみることができるのは、事後報告会である。報告会は複数回おこなわれ、私は、学内でオープン開催された報告会に出席した。

報告会で、気付かされたのは、もちろん第一にインターン修了学生の変化である。毎日学生の、（つまらなそうな？）表情をみている私たちは、報告会でのまた、そこでのスライ



ド内写真での学生たち

の表情をみるだけで、彼女らが大きく変化しつつあるのがわかる。日頃の授業や演習で、ただもじもじして大した発言もしない彼女らが、報告スライドのなかで、「思い切り跳んで」全力を尽くしている表情に

は、嫉妬さえおぼえさせられる（この点、後述でも論じる）。

報告会で、さらに気付かされるのは、「聴衆学生の姿勢」である。大学の授業ならびに、最近よくひらかれる学内での



- ・うまく話せなかったりもしたけれど、
- ・スタッフの方や他のインターン生、参加者のみなさんに支えられて無事やり遂げました！



キャリア系講演会・セミナーとはことなり、出席がまったく自由であったにもかかわらず、少なくない学生が積極的に出席した。また、通常の学内セッションでは、ほとんどの場合、聴衆学生から挙手発言があることはないが、ここでは、積極的な発言・質問が見られた（右、写真）。いつもかんじていることだが、この種のインターンシップ事業などは、「たとえ、実際に参加した学生の人数が少なくても、それ以外の学生も、じつは「気にしている」ことがほとんどだ」（胆）。この仮説的見通しが裏付けられた思いがする。



【ギャザリングに学生帯同。これがまた大きな効果をもった（胆）。後生、畏るべし！！】

本事業が他の連携大学と大きくことなっていた特色として、最後のギャザリング（をふくむ3日連続の関連イベント）に、少なくない学生（プロジェクト経験者経験中3人、他3人）を帯同して参加したことだ。じつは諸般の事情でこうなっただけで、あまり費用対効果など考えていなかったのだが、その効果には目をみはらされた。



移動日初日から、集合場所に遅刻してくる学生（右）がいて、先が思いやれた。が、二日目、三日目と学生たちの眼の色が変わってくるのがわかった。

最終日のギャザリングでは、たまたま私が出席していた部会で、本プロジェクトの経験学生が意見表明をもとめられ、立派に自分の体験にもとづく意見を述べていた。この種のギャザリングでは、じつは「エンドユーザー」ともいえる学生の生の声をほんとうにライブでスタッフたちが聞ける機会がほとんどない。CP、大学関係者たちも、彼女の発言を非常に真剣に注耳していたようだ（冒頭頁の、二つの写真、参照）。このように大人のスタッフたちに真剣に話を「聞いてもらえた」ということ自身彼女にとってはかけがえのない経験になったのではないだろうか？



また、部会あとのポスターセッションでも、大人世代の参加者と意見交換をおこなう学生の姿をみる事ができた。いわゆる、合同会社説明会でも、ただウロウロして、参加企業



ブースに行列して資料もらってかえってくるだけ、の学生の日常を知っている私には、頼もしいかぎりだった。

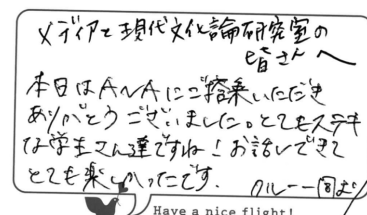
帰路、飛行機の搭乗時刻までの空き時間を利用して、反省会を行った。「専門用語が多すぎる」「熱すぎるヒトが多くて、ちょっとヒイテしまう」など、他の機会には、なかなか聞けない「苦い」ホンネ（胆）を聞くことできた。



ちょっとしたエピソードだが、帰路の飛行機内で、学生たちは搭乗のCAさんたちとおしゃべりをたのしませていただき、クルーのみなさんからメッセージつきのプレゼント（おみやげ）までいただいた。



このようなちょっとした大人との交流が「できる」ようになったこと自体が、本研修の大きな効果だったと思う。こういった、ちょっとした、大人との交流が、学生たちの社会性を陶冶していく（胆）のではないだろうか。



最後に、研修旅行の翌日、参加学生から来たメールをひいて、本節を終えよう。

「こんばんは。

先生に教えて頂いた通り、東京で名刺をいただいた方に昨日と今日で早速お礼メールを送りました。

そしたら何名かの方が返信を下さり、

今後の勉強に役立ててくださいと色々な資料まで送っていただきました。

やっぱりお礼メールやあいさつって重要なんですね・・・

ありがとうございました！」

【学生自体を「お客さん」としない、プロジェクト構想へ。学生に「舞台うらまで」見せてしまおう！。ただし、二つの重要な懸念がある！！】

以上をふまえて、第一に考えることは、本プロジェクトは、われわれにとって、大成功であったが、「プロジェクトを構想するときに、学生を、「対象＝お客さん」とかんがえた」きらいがあったのではないか、ということである（胆）。

学生たちを、ギャザリングに帯同するさい、私には、一つ懸念があった。「このような「舞台裏」をみせてしまうこと」は逆効果ではないか？、と。

私のこの懸念は、ほとんどは杞憂であったが、すこしはあたっていた。

学生たちは、「舞台裏」をみても何ら臆することなく、われわれのプロジェクトの「なかま」として、日々「主体」的になっていった。

それにたいして、むしろわれわれのほうが、彼ら参加学生を、「対象」「お客さん」として、プロジェクト設計をしてきたのではないかと実感・反省させられた。

今後は、学生たちにも、どんどん舞台裏をみせてしまっ、プロジェクトを構想していくことが、さらなく発展につながるのではなかろうか。

【次年度に向けた自立化・継続方法について】

この点については、私は、（予算的措置の必要性は生じるかもしれないが）、本プロジェクトの経験から何も心配はしていない。すばらしいCPを得て、われわれは、本県におけるソーシャルビジネスインターンシップについて、十分な「キックオフ」「テイクオフ」をできたと感じられる。経験した学生たちが、後輩学生たちに、自らの瞳の輝きとともに、次期のインターンをさそってくれる。われわれはその「世代間継承」のちょっとしたお手伝いをすればいいのではないか。

【地域にとってSBインターンシップはどういう意味があるのか？ 3-5年後に向け、地域でSBインターンシップをどのように育てていきたいか】

この点についても、いまはじまった「よい循環」を、そっと応援していけば、この「輪」が地域のなかにも、ひろがっていくというイメージをおさえることができない。

【今後にむけて、非常に重要な注意点、二つ】

このようにかなり成功したわれわれのプロジェクトだが、未来にむけて、注意点がないかというとももちろんそうではない。非常に大きな懸念点が、少なくとも二つあると思う。

・こぼれ学生と、モンスターペアレンツ対策（胆）

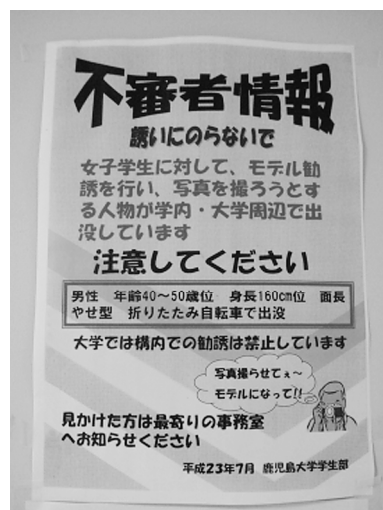
第一は、いわば、こぼれ学生と、モンスターペアレンツ、対策、だ。議論のなかで「壁作り」というのはながよくできてきた。現時点においては、各地のCPは、経験値が高く、無意識に、「その学生にちょうどいい、かべ」を用意してくれている、と思う。しかし、今後このような試みが「輪を抜げる」におうじて、CPが想定できないほど志の低い学生も参入してくる可能性が高い。彼女はなにかの壁にぶつかったとき、「そんな壁のりこえられるよ」と安易に言う周り大人はすべて「敵」と感じ、生まれついて以来の唯一の「味方」の「親」に泣きつくかもしれない。親としても事情はよくわからないが、少子化で数少なくなった「わが子」が、他の大人たちによってつぶされるのだけはなんとしてもふせがなければならない……、といったようなモンスターペアレンツ現象があちこちでおこる可能性はたかい。

今回のギャザリングでもこのような事例が紹介され、当該CPから周到な改善後処置をうかがうことができた。それを雛形に、全国のCPも早急に対策をとっておくことが必要だろう。

・大学教師の「ハーメルンの笛吹き男」懸念への対策（胆）

この種の事業に首を突っ込む大学教員にとって、最大の「相手」は、じつは「大学の教員」である。大学には、教育研究の自由があるので、一人の教員が、細ほぞとやっっていく分には、かなり自由に色々やってみることができる。（もちろん、道義・法律の範囲内で。）

しかし、明確にルール内で、やっていたとしても、それだけでは、安心できない一つの懸念がある。いわば「ハーメルンの笛吹き男」的懸念だ。



いままでの、(全日制の)大学の教員は、いわば学生を終日「囲い込んで」おくことができた。いわば「ライバル」がいなかったのである。ぜいぜい、車の教習所と、バイト、がライバルだった。が、教習はすぐおわるし、バイトは「昨今の経済状況では、こがね稼ぎにがんばらざるをえないなあ」

と「自分を納得させる」ことができた。

しかし、新しい「ライバル」が出現しつつある。インターンシップだ。教師からみて「良い学生」ほど、真面目にインターンシップに参加し、いい経験をし、夏休みあとに、「一皮むけて」、キャンパスにもどってくる。これはこれでとても素晴らしいことだ。教師はこの「いい経験」を生かして、その後の教育に生かしていくべきだ。

しかし、当事者の教師からは、「そう見えない」ことがこれからは多くなるだろう。たしかに彼・彼女（学生）はキャンパスにもどってきた。しかし、「カラダはキャンパスにもどってきた。が、ココロは、もうもどってきていない」。学外の素晴らしい達成経験に「ココロを奪われて」、学業に集中できなくなってしまっている……。いわばハーメルンの笛吹き男の逸話のように、学生はキャンパスから奪われてしまった……。どこまで、明確に意識するかはともかく、「前意識的」にそう感じる教員は少なくないのではないか。そのようなガス圧がたまっていたところに前記のような「ペアレント」からの「クレーム電話」がくる。この「事件」を契機・スケープゴートにして、「ガス圧」が集中して噴出する可能性がある。特定のCP、NPO、教員、授業、事業、が、標的となってしまう危険性がある。

このようなネガティブ・シナリオにたいする十分な配慮が必要だろう。

【おわりに】

ふたたび、「ゴジック体」である。前半で、「おちゃらけて」書いたからといって、本プロジェクト全体を私が高く評価していることは、もはや言うまでもないだろう。「おちゃらけた」部分の「気づき」（これもだれか、「流派方言」分析して！）自体、本プロジェクトへの「参画」（これもだれか！…以下同様）を通じてのみ得られた認識利得だった。

学生とくにインターンに参加した学生には、「目前の感動体験」以上の洞察を得てもらいたいと思い、本稿のような構成にしてみた。

紙数も費やしてしまったので、語り残したことを箇条書きでメモしておきたい。

- ・「ビジネス」といいつつ、お金・金額の話があまり（ほとんど）出てこないのは致命的だ。
- ・まずは、公金も含めた「内閣府→ETIC.→地域事務局」のお金の流れだ。もちろん、どっかの片隅にはちゃんとかいてあるはずだが、学生自身にそれを自覚させることが重要。
- ・学生にちょっとしたプロジェクト（ひと仕事）（かべつくり（←流派方言））をさせる。のだが、

これもあまり金額とくに「収支」を意識しないのが多くて不満である。赤字にしない、ほんのちょっとでもいいから黒字にする。これがビジネスの要諦だろう。持続可能性の要件でもある。

・「ソーシャル」と名付けることで、「働いたら（儲けたら）、負け」とおもっているニート類似層を実社会（市場）に引き出している功績は認める。しかしそのままでは結局「土農工商」の「商は、卑しい」、という価値観はかわらないのではないか。

・地域事務局自体が、「公金に依存した、自分探し」集団にならないよう、せつに祈る。

・現実の資本主義社会では、ほとんどの会社は、「設立時の、吐き出したタンス貯金」が尽きるとともにつぶれる（これ自体は、私は一種の理性の狡知として評価している）。このような厳しい現実への認識を学生は得られていないのではないか。

・雇用創造といいつつ、「乗数効果」を意識している役人・スタッフがほとんどいなかったのはおどろいた。猛省をもとめたい。

・かく言う私も、（一種の特殊）法人のパラサイト月給取りだ。自戒したい。

最後に繰り返すまでもないが、ほんとうに貴重な機会を、私ならびに、学生たちにあたえてくださった関係者の皆さんに深く深く感謝します。本文では、受け入れ企業さんへの言及はほとんどできなかった、とくにここで深く謝意を表したいと存じます。

sakurai.yoshio@nifty.com

文献

今一生 2008『社会起業家に学べ!』アスキー・メディアワークス

町田洋次 2000『社会起業家：「よい社会」をつくる人たち』PHP研究所

日本経済新聞 電子版 2011 2011/7/29 7:00「大学4年生、関西ではなぜ「4回生」と呼ぶのか」

<http://www.nikkei.com/life/gourmet/article/g=96958A9C93819B9AE0E2E2E2978DE0E2E2E5E0E2E3E39393E382E2E2;p=9694E3E6E2E4E0E2E3E2E4EAE6E4> (2012年3月29日閲覧)

斎藤慎 2004『社会起業家：社会責任ビジネスの新しい潮流』岩波書店